

第2回推進会議での意見と対応

No.	委員	意見	対応
1	大住委員	・地下水の取組みについて、他の課でやっている内容と変わらない ・地下水と生物多様性の関係を強調して謳うべきである（例：地下水が豊富だからこそ、生物多様性が〇〇である）	⇒この戦略は、生物多様性に関連する市内の既存事業を掲載している。地下水と生物多様性との関わりについては、概要版に記載する。
2	大住委員	・指標種モニタリングについて、現在、小学生を中心に簡単な水質調査を実施しているが、簡単なものでよいので、高校生以上の人たちと一緒に実施できないか考えている。	⇒必由館高校と連携した取組の中で提案していく。
3	奥村委員	・草刈りは一般的に、植林した樹木の下刈り作業を指しているきがするため、単なる草刈りで良いと考える。	⇒立田山に生育するトダスゲやサワトラノオなどの希少種について、種子が落ちてから下草刈りをするという事業をやっているため、そのままの表現とする。
4	奥村委員	・現状、市にある植栽スペースは狭く、根の伸長肥大により縁石の持ち上げ、根上がり等が発生し、雨水貯留機能が期待できないため、植栽基盤の整理を行い、街路樹の健全な生育を促すほうが優先ではないか。	⇒戦略5は、あくまで生物多様性のめぐみの活用という観点で記載しているが、植栽基盤の整備が重要という点についても、あわせて担当課と協議していく。
5	甲斐原委員	・地下水は生物多様性の豊かさのどの位置づけなのかを明確にしてほしい	⇒素案の中でわかりやすいイラストなどを用いて説明していく。
6	甲斐原委員	・施策等について市内のを中心で出すのであれば、「施策等」の等は不要。 ・戦略2「学び・つながる」も活動団体等と連携してというところで具体的な内容を出すのが分かりやすい	⇒説明資料の施策等の「等」は、施策のほか、状態目標・行動目標、成果指標なども含むという意味でつけている。 ⇒いきもんネット等の活動団体を取り組まれてきたことについては、素案の中で現状と課題として記載したい。
7	永野委員	・水前寺江津湖の地域は、地域住民が愛着を持ち、懸命に守っている ・地域住民との交流も非常に大切ではないか	⇒地域の方がずっと守ってこられたからこそ、この豊かな自然環境があるということをきちんと伝えていきたい。地域との交流も大事にしていく。
8	澤委員	・2Pの「市民一人ひとりが～」の記載は、熊本らしい言葉遣いを活用するべきである ・熊本独自の観点が大切である	⇒2ページの2050年の望ましい姿は、現戦略を最初に策定したときのものであるため、今回新たに設定する2030年目標の中で、熊本らしさを入れるよう検討する。
9	澤委員	・生物多様性や地下水のことは、境界線の選定が難しく、生物と水の繋がりは他の地域にも及んでいるという観点を持って戦略が立てられていることが重要である ・縦割りで区分するより、境界を突破する様な物の見方が重要	⇒素案の中で、ご意見にある都市圏の発想など入れるよう検討する。
10	澤委員	・温室効果ガス削減は都市圏での脱炭素の取組みという意味は分かるが、生物多様性に配慮した施策等の数など、各部局が取り組んでいる施策が生物多様性に繋がっているかなど、市としての全庁的な取組の評価が「見える化」されると良いのでは。	⇒基本戦略3「守る」の状態目標で「地球温暖化防止」に対する成果指標として、「温室効果ガス削減」を設定したが、ご意見いただいたような視点での指標も追加できないか検討する。
11	澤委員	・基本戦略4の指標に、熊本の多様な自然環境のありようについてなんらか取り込むことで、この戦略の持っている幅広さというものがうたえるのではないか。	⇒基本戦略4「創る」の成果指標に、30by30目標のための、OECD登録の日本の窓口である国の「自然共生サイトへの申請」を検討
12	澤委員	・基本戦略5「活かす」の指標は、地域の魅力、資源を活かしたイベントという形のとらえ方ということで、ここをこの戦略らしさというものをを出していただけるとよい。	⇒基本戦略5「活かす」の成果指標を、「生物多様性のめぐみである「地下水」の国内外への魅力発信件数」に変更
13	大澤委員	・基本戦略3「守る」の成果指標は、温室効果ガス削減だと生物多様性の戦略としては、あっていない感じ。例えば、緑地森林の保全とか緑化率とか保護区の割合とか、そういった面的な広がりや自然の豊かさを守るとような指標が自然な感じがする。	⇒基本戦略3「守る」の成果指標に緑被率を追加
14	大澤委員	・基本戦略3「守る」の地下水の施策で、地下水質の常時監視と硝酸性窒素対策とあるが、純粋に水質の監視と水質のコントロールのように見える。 ・水源かん養林の整備・保全を通じた地下水の保全の方が、生物多様性を使っていかに地下水を保全しているかというのがつながりを含めて分かりやすく示せると思う。	⇒ご意見を踏まえ再度検討する
15	大澤委員	・基本戦略4「創る」の重点プロジェクトで、上水道管の整備については、インフラの管理の話なので、ここに書くのはどうなのかという気がした。	⇒ここで上水道管の整備を入れたのは、上水道管が漏水すると余計に汲み上げなければならないため、漏水しないような整備も大切な地下水保全の取組の一つとしてお示ししたが、記載方法について検討する
16	大澤委員	・基本戦略4「創る」の成果指標が、江津湖の外来魚の割合で、もう少し市全体で外来種対策がどれだけ進んだかというのを図る指標があれば、検討を。 ・つながりの森補助金、ESG債の促進、市電の緑のじゅうたんの維持管理など、いろんな生物多様性に資するお金を市全体としてどれだけ動員できたかというのを指標にすると可視化しやすい。	⇒生息数を把握しているのが江津湖の魚類であることから、まずは、江津湖の外来魚の割合を指標として設定させていただきたい ⇒基本戦略4「創る」の指標提案については、他の委員からも意見のあったOECD推進の指標として、自然共生サイト申請数として設定を検討中

No.	委員	意見	対応
17	大澤委員	<ul style="list-style-type: none"> 基本戦略5「活かす」のところで、地下水の重点プロジェクトで魅力発信が書かれているが、魅力発信は普及啓発ではないか。 生物多様性を「活かす」という意味では、生物多様性を活かして、いかにすぐれた水質の十分な量の地下水を市民に提供できたかを前面に出した施策にしてもよい。 湧き出た地下水の水沿いにどれだけ優れた在来生物が守られているかという、生物指標を使って地下水の供給状況を評価する、それを成果指標にするというやり方もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ⇒魅力発信については、生物多様性のめぐみ（地下水もその1つ）を活かした取り組みであることから、戦略5「活かす」の取組とさせていただきます。 ⇒地下水の提供について、どれだけの量を提供できたかを指標にするのは、節水を進めている本市の施策と整合性をとることが難しいと考える。 ⇒地下水の水沿いの在来生物の把握が難しいため、指標にするのは難しいと考えている。
18	藤本委員	<ul style="list-style-type: none"> 市役所の活動指標だと成果指標にならない。成果指標の取り方は、活動指標にならないような形を考えていただく必要がある。 	⇒生物多様性のめぐみを活かしたプレゼンスの強化が目標であるため、「生物多様性のめぐみである「地下水」の国内外への魅力発信件数」に変更を検討中
19	藤本委員	<ul style="list-style-type: none"> 新しい項目の立て方として、熊本市自体が生物多様性に配慮した街づくりが行われているみたいなこともあってよいかも。 	⇒定義付けと指標としての数値化が困難であることから難しいと考えている。
20	藤本委員	<ul style="list-style-type: none"> 基本戦略5「活かす」の成果指標は、地下水を活用するということはある意味使ってもらうことでもあるので、地下水の水位などが維持される、増えた状態で且つ企業の立地数が増えているとか、そういう考え方もある。 	⇒企業立地件数は算出できるが、それが生物多様性のめぐみである地下水と関連あるかを測ることが難しいと考えている
21	佐山委員	<ul style="list-style-type: none"> 今回、地下水に着目して生物多様性を理解しようという視点はいいとが、逆に、生物同士の個性やつながりといった生物多様性のさらに外側にある地下水というものを含めると、さらに生物多様性というのは見えづらくなるという難点もある。 生物多様性と地下水のつながり、兼ね合いがどうなっているのか分かりやすいような表現の仕方というのは工夫が必要だと感じた。 	⇒依然として生物多様性の認知度が低く、多様な生物のことだと誤認している方も多いため、生物多様性のめぐみである地下水を例示することで間口を拡げ、より多くの方に生物多様性を広める契機にしたいと考えている
22	佐山委員	<ul style="list-style-type: none"> 基本戦略4「創る」の成果指標が外来魚の割合を出しているというのは矛盾というか、出すのであれば増えた在来種・希少種がどれくらい増えたかを出さないと成果指標にはならないという気がした。 	⇒生息数を把握しているのは、調査を行っている江津湖の魚類であることから、まずは、江津湖の外来魚の割合を指標として設定し、駆除で外来魚の割合を減らしていくことで、在来種の割合を増やすことに繋げたい。
23	佐山委員	<ul style="list-style-type: none"> 基本戦略3「守る」の状態目標の3-1の「生きものが安心して生息生育できる自然環境が保全されている」で、生物が安心してという表現は人間の視点であり、生きものは安心して生きているではなく、十分生息生育できるとかに修正した方がいい。 	⇒ご意見を踏まえ修正済み
24	佐山委員	<ul style="list-style-type: none"> 再生可能エネルギーの利用で、太陽光パネルについて、本来そこで伐採しなくていいような雑木林を伐採して設置するような、自然環境が破壊されているという矛盾がどうしても生じている。それぞれの取り組みに矛盾が生じないような観点が必要。 	⇒環境破壊をしないという前提での脱炭素化ということで、再生可能エネルギーの推進を謳っていく。
25	奥村委員	<ul style="list-style-type: none"> 地下水については、金峰山山系等の集水域で浸透した水が川になったり湧き出たりしている。集水域の里地里山では、そこからしみ込んだ地下水を井戸水として汲み上げ、水田を作って農業を営むことにより、この地域の農業生態系の中における生物多様性が保たれている。集水域を含めての生物多様性が維持されているという見方も必要。 	⇒金峰山や阿蘇からの話など、熊本市民が身近なものを使って仕組みを示していく。
26	甲斐原委員	<ul style="list-style-type: none"> 行政区や残したい自然とか、いろんな地域での最後の活かす、街づくり地域づくりに活かすというところで地域の方たちが一緒に活動していけるよう、生物多様性の豊かさの現状と課題を分かるようなイラストにしてまとめて欲しい。 	⇒市民に身近な場所、知っている写真などを使用し、説明していく。
27	永野委員	<ul style="list-style-type: none"> その地域にしっかり生きている、その環境を次の世代まで守ってもらうためには、子どもたちがとても大事で、巻き込んでいくような施策が大事。 	⇒高校生とは来年もいろいろ具体的にやれるというところで進めており、その視点を踏まえた対応を検討していく。
28	藤本委員	<ul style="list-style-type: none"> 骨子案の「創る」でOECMのことが書いてあるので、せつかく2030年の目標なので、9ページ、基本戦略4の「創る」のところで、象徴的な取り組みになるので、OECMの推進をぜひ書き込んで欲しい。 	⇒ご意見を踏まえ、OECMの推進を追加
29	藤本委員	<ul style="list-style-type: none"> 基本戦略1「知る」の施策の、「企業による生物多様性に関する情報開示の促進」について、今後企業は必ず生物多様性に配慮した行動が求められるし、それが取引の大事なポイントになる。なので、商工部門を巻き込んで欲しい。 	⇒ご意見を踏まえ、商工部門とも連携していく